

「社内学校」

平成23年6月15日

株式会社エモーション

代表取締役香川 湧慈

「会社は家族」

平成22年年末の今上天皇の御言葉

「絆を大切に助け合うことにより、皆でこの度の困難を乗り越えることを切に願っています。」

絆の本来の意味は、犬や馬等の動物を繋ぎ止めておく綱のこと。

結び付きと束縛の両方を共有している。

*元々、人間の願望は、この束縛からの解放であった。

戦後は、核家族化で地縁、血縁の共同体が弱体化した。

*非正規雇用社員の増加・農家の減少・晩婚化・少子化

絆＝束縛からの解放

選択の自由（個人の自由な生き方・全部自分で選択することが可能になって来た。）の結果、個人の人生が自ずから厳しい競争の原理にさらされる様になった。（負の側面）

自由は即ち、同時且つ必然的に敗者を生み出してしまう。（悲惨な結果）

絆の問題の解決の為には、現在の地域社会では多くの困難が伴う。

では、人の絆のある理想社会とは？

それは、無条件に社員の間で「家族のような感情」を抱けてこそ、魂レベルの結び付きのある真の会社。

*「家族のような感情」とは、苦しい時、お互いが困難に陥った時に、身を削ってでも、助け合おうとする人間関係である。

例えば、会社の業績向上により、給料を引き上げた。家族なら親が子供に小遣いを増額した。

家族であれば、例え良い事があっても、その背景にあるものを考え、常に家族全体のこととして出来事を捉える。それが真の家族である。

会社に於ける給料の増額を、会社全体にとって、果たしてこれでいいのか、と考える心の広さを持ってほしい。

例えば、社長が「来月から給料アップするぞ。」と社員皆に言った時、果たして何人が「社長、大丈夫ですか？未だ、そんなに上げる状況ではないのでは？」と言って心配する社員がいるか。

素直に喜びを表す社員が居て当然だが、まずは「心配心」を抱く社員が居ることがとても大事である。

良い悪いの問題でなく、この「身内意識」が自然と湧いて来る社員が多くいることが「会社は家族」を現実のものと成させるのである。発展に向かわさずものである。

家族なら、このようなお互いの思いやり、心遣いが互いの生き甲斐の源泉となって、エネルギーが湧いて来るのである。

企業の活力の源も、全て人間の心の広さ、覚悟、ヤル氣に掛かっている。

縁起とは、全てのものは、縁によって起こる。つまり、一切のものが関係し合っているという関係の上に存在している事実を確り見つめることが、仏の教えである。一切は縁起の変現である。

三世とは、過去・現在・未来のこと。

この過去・現在・未来に各々、過去・現在・未来が在る。

過去の中に「過去・現在・未来」

現在の中に「過去・現在・未来」

未来の中に「過去・現在・未来」合わせて九世と現世（今生きている世界）で十世。

この十世と十方（四方八方と上下で十方）

これが、私の中に全て存在する。これを自覚して、一瞬一瞬を全身全霊で華のように厳かに生きている姿を「華嚴」という。これぞ、理想の会社像。

会社に於ける社員は、他の社員や顧客の恩恵によって生かされている。且つ、同時にその社員自身もまた他の社員や顧客を生かしている訳である。

これを互いに重々無尽に関係し合って、共存共栄を図り、美しい調和の取れた会社を作る。

これが、華やかな華嚴を現すことになる。

互いは縁によって結ばれていることを自覚し、縁に感謝しつつ、己の仕事に励む。

自ずとそこに新たな良縁が結ばれ、己と共に会社も発展するという繁栄の法則が存在する。

曼荼羅図は、中心の仏に近い仏も居れば、遠い仏も居る。

会社で言えば、中心である社長と同じ志を持ち、己の仕事に打ち込み、常に心を広く持つことが出来たなら、自ずとその位置は中心に近付き、何ら中心と変わらない地位を占めることになる。

全て縁起と己の自覚・覚悟によって、常に流転変化して行くのが実態である。今の自分の立場で、何が出来て、どこまで会社のことを広く見渡せているかを、再認識してほしい。経済社会に於ける「華嚴世界」の実現を図ってほしい。